

CLUSTERPRO MC

ApplicationMonitor 2.9 for Linux

設定ファイルテンプレート作成コマンド

ユーザーズガイド

© 2024(Apr) NEC Corporation

- 概要と特長
- 設定
- 運用
- コマンドリファレンス

はしがき

本書は、CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux(以後 ApplicationMonitor と記載します)に付属する、設定ファイルテンプレート作成コマンド (amctf) の機能と操作方法について記載したものです。

(1) 本書は、以下の OS に対応します。

- ・ Red Hat Enterprise Linux 7.0～7.9, 8.1～8.9, 9.1～9.3
- ・ Oracle Linux 7.0～7.9, 8.1～8.9, 9.1～9.3

(2) 本書で説明しているすべての機能は、プログラムプロダクトであり、次の表のプロダクト型番およびプロダクト名に対応しています。

プロダクト型番	プロダクト名	プロダクトリリース
UL4437-G02	CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux (1CPU ライセンス)	2.9
UL4437-G12	CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux (1CPU ライセンス)(他社機版)	2.9
UL4437-G22	CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux VM (1 ノードライセンス)	2.9
UL4437-G32	CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux VM (1 ノードライセンス)(他社機版)	2.9
UL4437-G01	CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor CD 2.9	2.9

(3) 本書は、次の表現を使用します。

- ・ 大かっこ [] 省略可能なパラメータを表します。
- ・ 山かっこ < > 任意の文字列を指定することを表します。

(4) 商標および登録商標

- ✓ Linux は、Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における、登録商標または商標です。
- ✓ CLUSTERPRO は、日本電気株式会社の登録商標です。
- ✓ Oracle と Java は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。
- ✓ その他、本書に登場する会社名および商品名は各社の商標または登録商標です。
- ✓ なお、本書では®、TM マークを明記しておりません。

目次

1. 概要と特長	1
1.1. 概要	1
1.2. 特長	1
1.2.1. 設定情報自動収集機能.....	2
1.2.2. 出力フォーマットレベル変更機能	2
1.2.3. 対話・非対話形式での設定ファイルテンプレートの作成.....	2
2. 設定	3
2.1. パラメータ一覧.....	4
3. 運用	11
3.1. 対話形式での設定ファイルテンプレートの作成.....	11
3.2. 非対話形式での設定ファイルテンプレートの作成	18
3.3. 出力例	19
3.4. 注意事項.....	20
4. コマンドリファレンス	21

1. 概要と特長

1.1. 概要

設定ファイルテンプレート作成コマンド (amctf) は、ApplicationMonitor をインストールしたノード上の Oracle Database (19c、21c) (以後 Oracle と記載します) の設定情報を自動で取得し、ApplicationMonitor の設定ファイルのテンプレートを作成します。

ApplicationMonitor の構築時に設定ファイルテンプレート作成コマンドを用いることにより、ApplicationMonitor の設定ファイル (oramond.conf) を容易に作成することができます。

1.2. 特長

設定ファイルテンプレート作成コマンド (amctf) は、以下の特長・機能を持ちます。

- ◆ 設定情報自動収集機能
 - ・ Oracle 環境変数の自動収集
 - ・ リスナー設定値の自動収集(リスナー監視設定を追加出力する場合のみ)

- ◆ 出力フォーマットレベル変更機能
 - ・ リスナー監視設定の追加出力
 - ・ デフォルト値設定パラメータの追加出力
 - ・ 設定ファイルテンプレート出力先の切り替え(ファイル⇄標準出力)

- ◆ 対話・非対話形式でのテンプレート作成
 - ・ 対話モードによる柔軟な設定ファイルテンプレート作成機能
 - ・ 非対話モードによる簡易設定ファイルテンプレート作成機能

1 概要と特長

それぞれの特長・機能について説明します。

1.2.1. 設定情報自動収集機能

コマンド実行時に、指定されたノード上の Oracle 環境変数の情報 (ORACLE_BASE、ORACLE_HOME、ORACLE_SID、TNS_ADMIN、NLS_LANG) を自動で収集します。

また、設定ファイルテンプレートにリスナー監視の設定を含むオプションを指定、もしくは対話形式での作成時にリスナー監視設定を含む場合、指定されたノード上の Oracle リスナーの設定値を自動で収集します。

収集した各情報は、設定ファイルテンプレート作成時にのみ使用します。

1.2.2. 出力フォーマットレベル変更機能

設定ファイルテンプレートは、リスナー監視設定のテンプレートの含有有無・デフォルト値パラメータの含有有無・出力先の指定(ファイル名指定による任意ファイルへの出力、もしくは標準出力)が行えます。

1.2.3. 対話・非対話形式での設定ファイルテンプレートの作成

対話形式での設定ファイルテンプレートの作成は、コマンドが出力する質問に一つずつ答える形式で、設定ファイルテンプレートを作成します。複数のインスタンスが同一ノード上で動作している場合は、対話形式で設定テンプレートを作成するなど、環境により使い分けることで、目的の監視を設定したテンプレートの作成が可能です。

非対話形式での設定ファイルテンプレートの作成は、設定情報を自動で検索し、最初に検出した各設定値を用いて設定ファイルテンプレートを作成します。

2. 設定

設定ファイルテンプレート作成コマンド (amctf) により作成する設定ファイルテンプレートには、以下の設定を含みます。

- ◆ 監視対象とするインスタンスが動作するノード名 (NODE_NAME パラメータ)
- ◆ Oracle 環境変数パラメータ
 - ・ ORACLE_SID パラメータ
 - ・ ORACLE_BASE パラメータ
 - ・ ORACLE_HOME パラメータ
 - ・ ORA_NLS パラメータ
 - ・ SHLIB_PATH パラメータ
 - ・ NLS_LANG パラメータ
- ◆ インスタンス監視設定の OWNER_NAME パラメータ
- ◆ リスナー監視設定
- ◆ POLL_INTERVAL、POLL_TIMEOUT パラメータなどのデフォルト値を用意しているパラメータ

注意: インスタンス監視のユーザー指定表、PDB 監視モニタ (pdbmond)、表領域監視モニタ (tschkmond)、ディスク領域監視モニタ (fdsmond)、スタンバイ・インスタンスを監視する設定を含むスタンバイデータベース監視モニタ (stbdbmond) および統計情報採取モニタ (statsmond) の設定は、設定ファイルテンプレートに含みません。

注意: 指定したいいずれかのノードにのみ、リスナーの設定がされている環境の場合、リスナー監視の設定は、設定ファイルテンプレートに含みません。リスナー監視の設定を設定ファイルテンプレートに含む場合は、すべてのノードで同位置にリスナーが設定されている必要があります。

注意: Oracle Clusterware/Oracle Restart によって管理されているリスナーの設定は、設定ファイルテンプレートに含みません。

注意: CRS 監視設定ファイル (crsmond.conf) 、ASM 監視設定ファイル (asmmond.conf) 、SCAN リスナー監視設定ファイル (slsnrmond.conf) および ASM リスナー監視設定ファイル (alsnrmond.conf) の設定ファイルテンプレートは、作成できません。

2.1. パラメータ一覧

全ノードステートメントに出力するパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ名	出力形式	※1
NODE_NAME	指定された監視対象のノード名を出力します。最大 16 ノードまで指定が可能です。	◎
COMPONENT_ID	コメントアウトした形式で出力します。 ※異なる COMPONENT_ID パラメータを指定する場合は、コメントを外し、重複しない値を設定してください。	◎
MONATYPE	自動取得した値から求められた値を出力します。 ※ご使用の環境により、実際の値と異なる場合があります。そのような場合は、数値を書き換えて使用してください。	◎
LOG_LEVEL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 2 に設定して出力します。	△
SERVICE_PORT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 25312 に設定して出力します。	△
ADMIN_PORT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 25312 に設定して出力します。	△
HEARTBEAT_INTERVAL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 10 に設定して出力します。	△
ELECTION_ACK_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 10 に設定して出力します。	△
HALT_CONTROL_POLICY	デフォルト値を含む場合にのみ値を FIRST_FAILED に設定して出力します。	△
HALT_CONTROL_OPTION	デフォルト値を含む場合にのみ値を ALWAYS に設定して出力します。	△
HALT_CONTROL_METHOD	デフォルト値を含む場合にのみ値を NONE に設定して出力します。	△
ORACLE_BASE	自動収集もしくは指定された値を出力します。	◎
ORACLE_HOME	自動収集もしくは指定された値を出力します。	◎
ORA_NLS	ORACLE_HOME の値から自動生成したパスを出力します。	◎
SHLIB_PATH	ORACLE_HOME の値から自動生成したパスを出力します。	◎
NLS_LANG	自動収集もしくは指定された値を出力します。	○
TNS_ADMIN	自動収集もしくは指定された値を出力します。	○
MONITOR_USER	デフォルトの実効ユーザー (oracle) もしくは指定されたユーザーを出力します。	◎
BOOT_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 10 に設定して出力します。	△
MONITOR_CONTROL	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△
SCRIPT_USER	デフォルト値を含む場合にのみ値を root に設定し、コメントアウトした形式で出力します。	△
SCRIPT_NAME	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△
SCRIPT_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 30 に設定し、コメントアウトした形式で出力します。	△
SQL_LEVEL	デフォルト値を含む場合にのみ値を UPDATE に設定して出力します。	△

パラメータ名	出力形式	※1
ORACLE_HANG_CHECK	デフォルト値を含む場合にのみ値を NO に設定して出力します。	△
CHECK_WAIT_EVENT	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△
GRID_BASE	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△
GRID_HOME	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△
GRID_USER	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△

※1 パラメータを出力する条件を示します。常に出力する場合は◎、取得した値が存在する、取得した値がデフォルト値と異なる、もしくはデフォルト値を含む出力の場合は○、デフォルト値を含む出力の場合は△です。

パラメータの詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux ユーザーズガイド』を参照してください。

2 設定

デフォルト値を含む場合、全ノードステートメントには、SystemStateDaemon ステートメントも出力します。

パラメータ名	出力形式	※1
GET_DUMP	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△
LOG_LEVEL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 2 に設定して出力します。	△
ORACLE_USER	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△
ORACLE_PASS	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△
SYSDBA_CONNECT	デフォルト値を含む場合にのみ値を NO に設定して出力します。	△
POLL_INTERVAL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 60 に設定して出力します。	△
POLL_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 60 に設定して出力します。	△
DUMP_INTERVAL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 30 に設定して出力します。	△
DUMP_COUNT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 3 に設定して出力します。	△
DUMP_LEVEL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 10 に設定して出力します。	△
DUMP_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 90 に設定して出力します。	△

※1 パラメータを出力する条件を示します。常に出力する場合は◎、取得した値が存在する、取得した値がデフォルト値と異なる、もしくはデフォルト値を含む出力の場合は○、デフォルト値を含む出力の場合は△です。

パラメータの詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux ユーザーズガイド』を参照してください。

Node ステートメント内に出力するパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ名	意味	※1
ORACLE_SID	自動収集もしくは指定された値を出力します。	◎

※1 パラメータを出力する条件を示します。常に出力する場合は◎、取得した値が存在する、取得した値がデフォルト値と異なる、もしくはデフォルト値を含む出力の場合は○、デフォルト値を含む出力の場合は△です。

パラメータの詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux ユーザーズガイド』を参照してください。

2 設定

InstanceMonitor ステートメント内に出力するパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ名	意味	※1
LOG_LEVEL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 2 に設定して出力します。	△
MONITOR_USER	デフォルト値を含む場合にのみデフォルトの実効ユーザー (oracle) もしくは指定されたユーザーを出力します。	△
ORACLE_USER	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△
ORACLE_PASS	デフォルト値を含む場合にのみ値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。	△
SYSDBA_CONNECT	デフォルト値を含む場合にのみ値を NO に設定して出力します。	△
OWNER_NAME	SYS に設定して出力します。 ※インスタンス監視表を所有するユーザー(以後 スキーマ と記載します)が SYS ユーザー以外の場合は、値を書き換えて使用してください。	○
BOOT_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 10 に設定して出力します。	△
POLL_INTERVAL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 90 に設定して出力します。	△
POLL_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 120 に設定して出力します。	△
REFORM_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 30 に設定して出力します。	△
POLL_DOWN_RETRY	デフォルト値を含む場合にのみ値を 0 に設定して出力します。	△
POLL_STALL_RETRY	デフォルト値を含む場合にのみ値を 0 に設定して出力します。	△
SERVICE_DOWN	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△
RESTART_COUNT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 2 に設定して出力します。	△
RESTART_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 60 に設定して出力します。	△
UP_DOWN_RETRY	デフォルト値を含む場合にのみ値を 5 に設定して出力します。	△
UPTIME_COUNT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 1 に設定して出力します。	△
GET_STATS	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△

※1 パラメータを出力する条件を示します。常に出力する場合は◎、取得した値が存在する、取得した値がデフォルト値と異なる、一定の条件を満たす、もしくはデフォルト値を含む出力の場合は○、デフォルト値を含む出力の場合は△です。

パラメータの詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux ユーザーズガイド』を参照してください。

リスナー監視設定を含む場合、ListenerMonitor ステートメント内に出力するパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ名	意味	※1
NET_SERVICE_NAME	自動収集した値を出力します。 自動収集できなかった場合は、値なしの状態、コメントアウトした形式で出力します。 ※コメントアウトされた場合、ネット・サービス名を解決し、値を設定してください。	◎
LOG_LEVEL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 2 に設定して出力します。	△
MONITOR_USER	デフォルト値を含む場合にのみデフォルトの実効ユーザー (oracle) もしくは指定されたユーザーを出力します。	△
BOOT_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 10 に設定して出力します。	△
LSNR_CHECK_MODE	デフォルト値を含む場合にのみ値を PING に設定して出力します。	△
POLL_INTERVAL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 60 に設定して出力します。	△
POLL_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 90 に設定して出力します。	△
MONITOR_CONTROL	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△
SERVICE_DOWN	デフォルト値を含む場合にのみ値を NO に設定して出力します。	△
RESTART_COUNT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 5 に設定して出力します。	△
RESTART_INTERVAL	デフォルト値を含む場合にのみ値を 3 に設定して出力します。	△
TNSPING	デフォルト値を含む場合にのみ値を tns ping に設定して出力します。	△
TARGET_RESTART	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△
RESTART_TIMEOUT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 60 に設定して出力します。	△
UP_DOWN_RETRY	デフォルト値を含む場合にのみ値を 5 に設定して出力します。	△
UPTIME_COUNT	デフォルト値を含む場合にのみ値を 1 に設定して出力します。	△
GET_STATS	デフォルト値を含む場合にのみ値を YES に設定して出力します。	△

※1 パラメータを出力する条件を示します。常に出力する場合は◎、取得した値が存在する、取得した値がデフォルト値と異なる、もしくはデフォルト値を含む出力の場合は○、デフォルト値を含む出力の場合は△です。

パラメータの詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux ユーザーズガイド』を参照してください。

3. 運用

2 ノード RAC 構成の Oracle の設定を自動取得し、ApplicationMonitor の設定ファイルテンプレートを作成する手順を説明します。

3.1. 対話形式での設定ファイルテンプレートの作成

- 1 root ユーザーでログインし、引数なしで設定ファイルテンプレート作成コマンド (amctf) を実行します。

```
# /opt/HA/AM/bin/amctf
```

設定ファイルテンプレート作成コマンドの詳細は、「4 コマンドリファレンス」を参照してください。

- 2 対話形式では、次の順でコマンドの入力を要求します。要求した項目に対し、適切な値または番号を入力することで、設定ファイルテンプレートが作成できます。

◆ 構成情報管理サーバ (oraconfd) のポート番号

```
Please input port number that AM configuration-server. default[25310]  
amctf>
```

動作中の構成情報管理サーバのポート番号を入力してください。

入力可能な値は、1024~65535 までの値になります。

値を入力せず、リターンキーを押下した場合は、25310 を設定します。

◆ 設定ファイルテンプレートに含めるノード名

```
Please input node name that AM configuration-server running.  
Please do not input anything to proceed to the next step, and press the return.  
amctf>
```

監視対象の Oracle が存在し、構成情報管理サーバの動作しているノード名を指定してください。

要求ごとに 1 ノードの入力が可能です。

最大で 16 ノード指定が可能です。

指定したノード数が最大ノード数 (16) に達した場合、もしくは値を入力せず、リターンキーを押下した場合に次のステップに進みます。

◆ MONITOR_USER パラメータに指定するユーザー名

```
Please input monitor user name. default[oracle]
amctf>
```

監視モニタの実効ユーザーとして使用可能な監視対象の Oracle の環境変数を保有するユーザー名を指定してください。

値を入力せず、リターンキーを押下した場合は、oracle を設定します。

◆ ORACLE_BASE パラメータの値

```
Please select ORACLE_BASE from the following lists.
Please input number.

[0]: Input ORACLE_BASE by yourself.
[1]: /u01/app/oracle

amctf>
```

ユーザーの環境変数 ORACLE_BASE の値が取得できた場合は、該当の ORACLE_BASE の値のリストを選択肢として表示します。

監視対象とする Oracle の ORACLE_BASE が表示された選択肢の番号を入力してください。

```
Please input ORACLE_BASE.
amctf>
```

ORACLE_BASE の値が取得できなかった場合、もしくは選択肢の "0" を選択した場合は、任意の値を入力することができます。

注意: 任意の ORACLE_BASE の値を入力する場合は、絶対パスで存在するパスを入力してください。

◆ ORACLE_HOME パラメータの値

```
Please select ORACLE_HOME from the following lists.  
Please input number.
```

```
[0]: Input ORACLE_HOME by yourself.  
[1]: /u01/app/oracle/product/21.3.0/dbhome_1  
[2]: /u01/app/21.3.0/grid
```

```
amctf>
```

ユーザーの環境変数および /etc/oratab より、ORACLE_HOME の値が取得できた場合は、該当の ORACLE_HOME の値のリストを選択肢として表示します。

監視対象とする Oracle の ORACLE_HOME が表示された選択肢の番号を入力してください。

```
Please input ORACLE_HOME.  
amctf>
```

ORACLE_HOME の値が取得できなかった場合、もしくは選択肢の "0" を選択した場合は、任意の値を入力することができます。

注意: 任意の ORACLE_HOME の値を入力する場合は、絶対パスで存在するパスを入力してください。

◆ TNS_ADMIN パラメータの値

```
Please select TNS_ADMIN from the following lists.  
Please input number.  
  
[0]: Input TNS_ADMIN by yourself.  
[1]: default = value is not set.  
  
amctf>
```

ユーザーの環境変数より、TNS_ADMIN の値が取得できた場合は、該当の TNS_ADMIN の値をリストに含め、選択肢として表示します。

取得できなかった場合は、"0" と "1" のみの選択肢となります。

監視対象とする Oracle の TNS_ADMIN が表示された選択肢の番号を入力してください。

"1" を選択した場合、デフォルト値である \$ORACLE_HOME/network/admin を TNS_ADMIN の値として設定します(設定ファイルテンプレート上には表示しません)。

```
Please input TNS_ADMIN.  
amctf>
```

選択肢の "0" を選択した場合、任意の値を入力することができます。

注意: 任意の TNS_ADMIN の値を入力する場合は、絶対パスで存在するパスを入力してください。

◆ NLS_LANG パラメータの値

```

Please select NLS_LANG from the following lists.
Please input number.

[0]: Input NLS_LANG by yourself.
[1]: default = AMERICAN_AMERICA.US7ASCII
[2]: japanese_japan.ja16euc

amctf>

```

ユーザーの環境変数より、NLS_LANG の値が取得できた場合は、該当の NLS_LANG の値をリストに含め、選択肢として表示します。

取得できなかった場合は、"0" と "1" のみの選択肢となります。

監視対象とする Oracle の NLS_LANG が表示された選択肢の番号を入力してください。

"1" を選択した場合、デフォルト値である AMERICAN_AMERICA.US7ASCII を NLS_LANG として設定します(デフォルト値を選択した場合は、デフォルト値を含む出力を選択した際、設定ファイルテンプレートに出力します)。

```

Please input NLS_LANG.
amctf>

```

選択肢の "0" を選択した場合、任意の値を入力することができます。

◆ ノードごとの ORACLE_SID パラメータの値

```

Please select ORACLE_SID from the following lists as on node = node1.
Please input number.

[0]: Input ORACLE_SID by yourself.
[1]: sid1
[2]: +ASM1

amctf>

```

ユーザーの環境変数および /etc/oratab より、ORACLE_SID の値が取得できた場合は、該当の ORACLE_SID の値のリストを選択肢として表示します。

監視対象とする Oracle の ORACLE_SID が表示された選択肢の番号を入力してください。

```

Please input ORACLE_SID.
amctf>

```

ORACLE_SID の値が取得できなかった場合、もしくは選択肢の "0" を選択した場合は、任意の値を入力することができます。

◆ リスナー監視設定の設定ファイルテンプレート含有有無の確認

```
Is the listener monitoring added to the template?  
Please input Y or N. default[N]  
amctf>
```

リスナー監視設定を設定ファイルテンプレートに含めるかどうか選択します。
含める場合は Y、含めない場合は N、もしくは値を入力せずにリターンキーを押下してください。

注意: 指定したいいずれかのノードのみリスナーの設定がされている環境の場合、リスナー監視設定は、設定ファイルテンプレートに含みません。

リスナー監視設定を設定ファイルテンプレートに含む場合は、すべてのノードで同位置にリスナーが設定されている必要があります。

◆ デフォルト値の設定ファイルテンプレート含有有無の確認

```
Is the default value output to the template?  
Please input Y or N. default[N]  
amctf>
```

デフォルト値のパラメータを設定ファイルテンプレートに含めるかどうか選択します。
含める場合は Y、含めない場合は N、もしくは値を入力せずにリターンキーを押下してください。

設定ファイルテンプレートに含むデフォルト値のパラメータについては、「2.1 パラメータ一覧」を参照してください。

◆ 設定ファイルテンプレートの出力先の確認

```
Is the template output to the file?
Please input Y or N. default[Y]
amctf>
```

設定ファイルテンプレートをファイルに出力するか選択します。

ファイルに出力する場合は Y、もしくは値を入力せずにリターンキーを押下してください。

ファイルに出力しない場合は N を入力することで、設定ファイルテンプレートの内容を標準出力します。

```
Please input template file name. default[/etc/opt/HA/AM/conf/oramond.tmp]
amctf>
```

ファイルに出力する場合、ファイル名の入力要求を出力します。

ファイル名を入力してください。

値を入力せず、リターンキーを押下した場合、/etc/opt/HA/AM/conf/oramond.tmp をデフォルトのファイル名として適用します。

```
The file was found. Do you overwrite?
Please input Y or N. default[Y]
amctf>
```

入力したファイル名がすでに存在する場合、上書きをするか選択します。

上書きをする場合は Y、もしくは値を入力せずにリターンキーを押下してください。

上書きをしない場合は N を入力することで、再度ファイル名の入力要求を出力します。

- 3 要求終了後、次のメッセージを出力し、設定ファイルテンプレートを作成、もしくは標準出力します。

```
Output template.
```

メッセージの詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux メッセージ一覧』を参照してください。

3.2. 非対話形式での設定ファイルテンプレートの作成

- 1 root ユーザーでログインし、適切なオプションをつけ、設定ファイルテンプレート作成コマンド (amctf) を実行します。

```
# /opt/HA/AM/bin/amctf -n node1 -n node2 -u oracle -l
```

上記は、ノード名 node1 および node2 について、ユーザー oracle の設定情報を入手し、リスナー監視設定を含めた設定ファイルテンプレートを作成するコマンドになります。

設定ファイルテンプレート作成コマンドの詳細は、「4 コマンドリファレンス」を参照してください。

- 2 適切な環境変数が取得できた場合、以下のメッセージを出力し、設定ファイルテンプレートを作成します。

```
Output template.
```

メッセージの詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux メッセージ一覧』を参照してください。

3.3. 出力例

リスナー監視を含め、node1 および node2 の設定ファイルテンプレートを作成した例は、以下のとおりです。

```
# Thu Feb 21 10:11:02 2020

NODE_NAME      = node1
NODE_NAME      = node2
#COMPONENT_ID  = 0
MONTYPE        = 21C
ORACLE_BASE    = /u01/app/oracle
ORACLE_HOME    = /u01/app/oracle/product/21.3.0/dbhome_1
ORA_NLS        = /u01/app/oracle/product/21.3.0/dbhome_1/nls/data
SHLIB_PATH     = /u01/app/oracle/product/21.3.0/dbhome_1/lib
NLS_LANG       = japanese_japan.ja16euc
MONITOR_USER   = oracle

Node node1 {
    ORACLE_SID  = sid1

    InstanceMonitor {
        OWNER_NAME = SYS
    } # End of InstanceMonitor statement

    ListenerMonitor LISTENER {
        NET_SERVICE_NAME = LSNR
    } # End of ListenerMonitor statement
} # End of Node statement

Node node2 {
    ORACLE_SID  = sid2

    InstanceMonitor {
        OWNER_NAME = SYS
    } # End of InstanceMonitor statement

    ListenerMonitor LISTENER {
        NET_SERVICE_NAME = LSNR
    } # End of ListenerMonitor statement
} # End of Node statement
```

3.4. 注意事項

出力した設定ファイルテンプレートについての注意事項は、以下のとおりです。

- ◆ 同一ノード上で複数インスタンスが動作している場合は、設定ファイルテンプレート作成後、以下のパラメータを追加／変更する必要があります。
 - ・ COMPONENT_ID パラメータ
 - ・ SERVICE_PORT パラメータ
 - ・ ADMIN_PORT パラメータ

- ◆ InstanceMonitor ステートメント内の OWNER_NAME パラメータには SYS を出力します。インスタンス監視表のスキーマが SYS ユーザー以外の場合は、値を変更する必要があります。

- ◆ リスナー監視の設定を含んだ設定ファイルテンプレートを作成した際、対象のリスナーに対応したネット・サービス名が検出できず、NET_SERVICE_NAME パラメータをコメントアウトした状態で出力する場合があります。

コメントアウトされた状態では、設定ファイルの確認および配布ができませんので、ネット・サービス名を解決し、パラメータ値を決定する、あるいはコメントアウトされた NET_SERVICE_NAME パラメータを含む ListenerMonitor ステートメントを削除してから設定ファイルテンプレートを使用するようにしてください。

なお、冗長化リスナーの監視を行う際に、リスナーの状態監視を行う場合は (LSNR_CHECK_MODE パラメータの設定値が STATUS の場合は)、ネット・サービス名を指定する必要はありません。

- ◆ 5 ノード以上でクラスタを構成している環境で ApplicationMonitor を使用する場合は、次のパラメータを調整する必要があります。
 - ・ HEARTBEAT_INTERVAL パラメータ
 - ・ ELECTION_ACK_TIMEOUT パラメータ

パラメータ調整についての詳細は、別冊の『CLUSTERPRO MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux を 5 ノード以上の RAC 構成で使用する場合の補足事項』を参照してください。

4. コマンドリファレンス

amctf

名 前 amctf — 設定ファイルテンプレート作成コマンド

形 式 /opt/HA/AM/bin/amctf

amctf -n <ノード名> [-n <ノード名> ...] [-u <ユーザー名>] [-f <ファイル名>] [-p <ポート番号>] [-laoh]

機能説明 設定ファイルテンプレート作成コマンドは、ApplicationMonitor の設定ファイルテンプレートを作成するためのコマンドです。
各ノードの Oracle 環境変数を自動で取得し、ApplicationMonitor の設定ファイルのテンプレートを自動で作成します。
引数なしでコマンドを実行した場合、対話形式で設定ファイルテンプレートを作成します。

-n <ノード名> ... ApplicationMonitor を動作させるノードを指定します。
非対話形式で設定ファイルテンプレートを作成する場合は、必須オプションです。
他のオプションが指定されている状態で、本オプションが指定されていない場合は、usage を出力してコマンドを終了します。
最大 16 個までノード名を指定可能です。

-u <ユーザー名> 監視モニタの実効ユーザーを指定します。
指定しない場合は、oracle ユーザーをデフォルトとして使用します。
oracle ユーザーが OS 上に作成されていない場合は、エラーメッセージを出力してコマンドを終了します。

-f <ファイル名> 設定ファイルテンプレートのファイル名を指定します。
指定しない場合は、/etc/opt/HA/AM/conf/oramond.tmp の名称で設定ファイルテンプレートを作成します。
すでに指定されたファイルが存在する場合は、上書きします。

-p <ポート番号> 構成情報管理サーバのポート番号を指定します。
指定しない場合は、25310 番ポートをデフォルトとして使用します。

-l リスナー監視の設定を設定ファイルテンプレートに含めます。

-a デフォルト値を含んだ設定ファイルテンプレートを作成します。

-o 設定ファイルテンプレートをファイルではなく、標準出力に出力します。

-h ヘルプメッセージを出力します。

使用例 ノード node1 とノード node2 のテンプレートを作成する場合
/opt/HA/AM/bin/amctf -n node1 -n node2
を実行することで、/etc/opt/HA/AM/conf/oramond.tmp を作成します。

ファイル /opt/HA/AM/bin/amctf

注 意 設定ファイルテンプレート作成コマンドは、同一ノードおよび別ノードを問わず、同時に複数実行することはできません。また、同一ノードおよび別ノードを問わず、管理コマンド (oraadmin) との同時実行もできません。
設定ファイルテンプレート作成コマンドは、root ユーザーのみ実行できます。

4 コマンドリファレンス

索引

A		た	
amctf	21	対話形式での設定ファイルテンプレートの作成	2, 11
う		ち	
運用	11	注意事項	20
か		と	
概要	1	特長	1
し		は	
出力フォーマットレベル変更機能	2	パラメーター一覧	4
出力例	19	ひ	
せ		非対話形式での設定ファイルテンプレートの作成	2, 18
設定	3		
設定情報自動収集機能	2		
設定ファイルテンプレート作成コマンド	21		

CLUSTERPRO
MC ApplicationMonitor 2.9 for Linux
設定ファイルテンプレート作成コマンド
ユーザーズガイド

2024年 4月 第1版
日本電気株式会社
東京都港区芝五丁目7番地1号
TEL (03) 3454-1111(代表)



© NEC Corporation 2012-2024

日本電気株式会社の許可なく複製、改変などを行うことはできません。
本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。

保護用紙